

第6章 昭和60年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 経済学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 経済学部構内 K-21, L-20区

調査期間 昭和60年7月12日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約5m²

調査結果 経済学部構内西半部では昭和55年度に経済学部E棟（大講義棟）新営に伴う試掘調査、昭和59年度に立会調査を実施している。その結果、少なくとも現地地表下約70cmまでは置土（攪乱土）の範囲内であり、かつE棟以南はその規模は不明であるが狭い河川が検出され、教育学部美術科・技術科実験実習棟方向に走っていることが確認されている。しかし、東半部では今日まで調査が行なわれておらず、地下の状況は不明であった。今回の調査はその東半部を含むD棟周辺地域5地点での樹木移植に伴うものである。

工事による掘削深度である現地地表下約60cmまでは攪乱土であったが、第1・第5地点で深掘りを行なった結果、第1地点では現地地表下約80cmで黒褐色粘質土が確認され、遺構ないしは遺物包含層の存在を予想させた。また、第5地点では現地地表下約70cmで黄褐色粘質土の地山を検出したが、昭和53年度に実施した人文学部校舍新営に伴う試掘調査でこの地山の大規模な削平が確認されており、当構内も既に削平されている可能性が高い。なお、当構内は人文学部構内に比べ階段状にかなり低くなっており、かつ当該地域の削平状況が不明なため、遺構が埋存しているかどうかは今後の調査によって明らかにする必要がある。

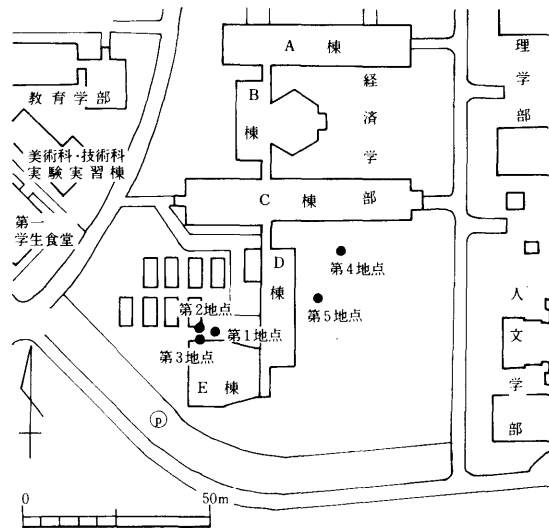


Fig. 31 調査区位置図

(河村)

2 農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 R-16~19区

調査期間 昭和60年11月7日、昭和61年2月26日、4月23・24日

調査方法 工事施工時における立会・試掘調査

調査面積 約30m²

調査経過 大学キャンパス東部の飼料園、果樹園および樺野寮となっている地域は、キャンパス中央部および西部に比べて約5m近く高所に位置し、円筒埴輪が採集されている¹⁾ほか、吉田遺跡調査団によって古墳時代以降の中世を中心とした集落遺構の埋存が報告されている。

今回の工事は、昭和49年に北側の飼料園東端部で整備された素掘りの排水溝が、埋没し排水不良となっているため、再掘削し修復するものである。また、工事規模は、総延長距離約120mの既存の排水溝の溝底を約50cm下げるとともに、溝幅を約70cm拡幅するものであるが、吉田遺跡調査団による具体的な埋蔵文化財の調査資料、および当時の工事内容を示す資料がなく、工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがあることが考えられたため、埋蔵文化財資料館運営委員会および関連部局との協議の結果、立会調査を実施した。

調査は、約20m間隔に約1.7m×3mのトレンチ6本を設定して工事予定地内の埋蔵文

化財の有無、および土層の堆積状況を観察した。その結果、中央部では顕著な遺構、遺物包含層は認められなかったが、北端部で中世のものと思われる遺物包含層、および南端部において古墳時代・中世の遺物包含層、河川跡を検出した。

これを受けて、関係部局と協議を行なった結果、工事計画・規模の変更は困難であるとの結論に達し、後日、改めて記録保存の調査を実施することとした。

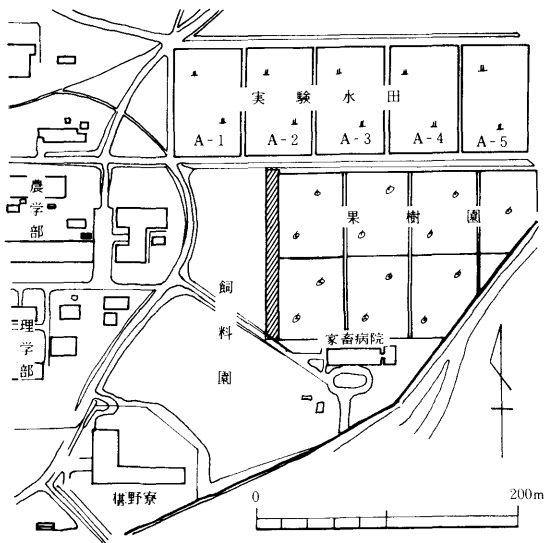


Fig. 32 調査区位置図

吉田構内の立会調査

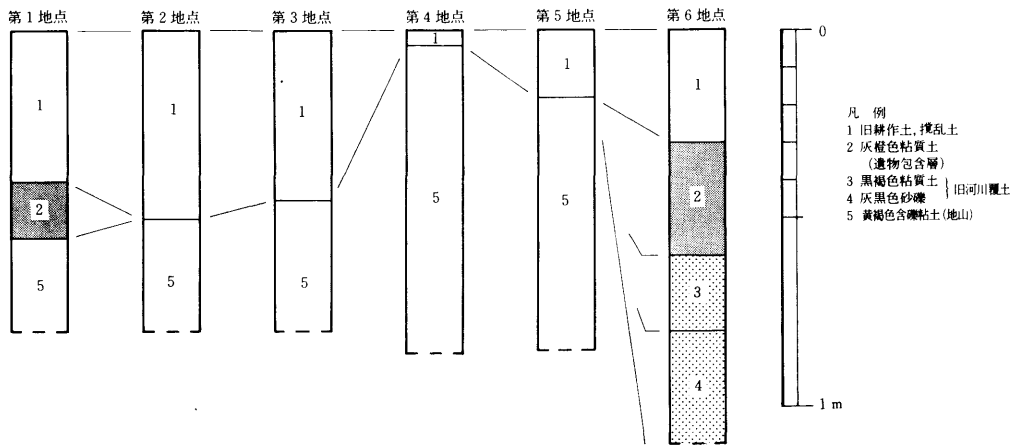


Fig. 33 土層断面基本柱状図

調査結果

層位

中央部よりやや南側の第4地点では地山が最も高い地点で検出され、厚さわずか約4cmの耕作土直下が黄褐色礫混じり粘土の地山となっている。第1地点、第6地点では厚さ約40cmの旧耕作土および攪乱土、下位に中世の遺物包含層と考えられる灰橙色粘質土が約10~20cm堆積しており、各地点での地山にいたる堆積層および地山の標高差を考えあわせると、第4地点付近が東から西へ延びる丘陵の鞍部にあたるものと推察された。

遺構

南端部を中心に土壙、河川跡を検出した。

土壙は工事地域の南端部から約28m付近の現地表下約30cmで検出されたが、断面観察時に確認したものでその形状、規模は不明である。深さは検出面から約20cmであるが、灰色土の覆土から堆して近世以降のものであろう。

河川跡はこの土壙のすぐ南側で検出した。南東から北西に流路をもつもので、最南端部では地山の立ち上がりを確認しており、上面の幅は約2.4m以上の規模をもつ。工事規模とのかねあいから、深さは約50cmまでしか観察していないが、上層から須恵器、土師器を含む厚さ約15~20cmの黒褐色粘質土、厚さ約30~35cmの灰黒色砂礫が堆積する。なお、両層とも植物遺体を含んでいた。

遺物 (Fig. 34, PL. 21)

河川跡から須恵器、土師器、輸入陶磁器、轆口および石皿、石核、鉄滓が出土した。

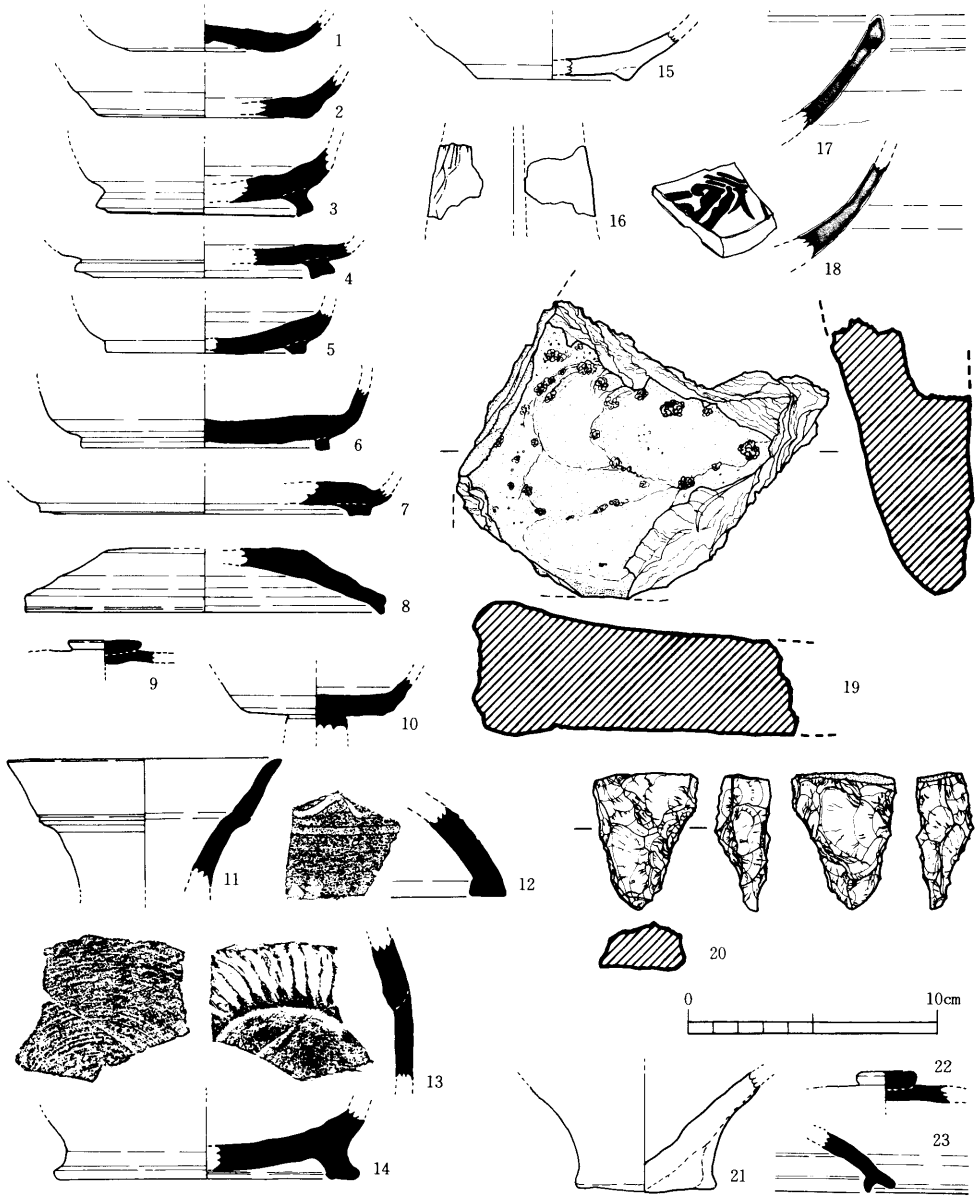


Fig. 34 出土遺物実測図

須恵器（1～14） 坏、高坏、甃、器台、横盆、壺がある。坏身はいずれも底部の破片で高台をもたないもの（1・2）と高台をもつもの（3～7）とがある。1は底部と体部の境が不明瞭でやや上げ底ぎみ。回転篋切り放しのまま放置する。2は静止篋切り放しを行

なう。後者は底体部の境より内側に高台を貼付するもので、外方へ開き高台内側端を接地面とするもの（3・4）と直立するやや扁平な高台を有するもの（5～7）とがある。5は底部外面を回転篋切り放した後、篋によるナデツケを行なう。坏蓋は平坦な天井部からゆるやかに下降して、屈曲することなく断面鳥嘴状の口縁部にいたるもの（8）があり9に近いやや扁平なボタン状の撮みを有するものであろう。8は天井部内外面ナデ、体部、口縁部は横ナデ。高坏（10）は口径の小さい屈曲して立ち上がる杯部をもつものであろう。甕（11）はあまり屈曲せず、外上方へ開く口縁部外面に篋による一条の沈線がめぐる。内外面とも横ナデ。12は器台脚裾部で外面篋による沈線、波状文を施文する。13は横瓮の体部で粘土円板貼付痕が明瞭に残る。壺（14）は外方へ開くやや低い高台をもつ。高台端部はヨコナデによりわずかにくぼむ。底部内外面ナデ、他は横ナデ。

土師器（15） 碗の底部で断面三角形の高台を貼付する。器表の磨滅、剝落が著しい。

甕口（16） 外面の一部が赤橙色に熱変しており、亀裂を生じている。滓の付着は見られない。なお、他に鉄滓の出土がある。

輸入陶磁器（17・18） 17は白磁碗で口縁部は玉縁状になるが、ほとんど肥厚しない。釉²⁾がかりはうすく、体部下半へは施釉していない。横田・森田の白磁Ⅳ類。18は龍泉系の青磁碗で内面に片彫り草花文を施文するが、極めて不鮮明である。内外面に薄く施釉する。13C前半か。

石皿（19） 転石利用の石皿で上面のみを使用面とし、他は自然面を残す。使用面に顕著なくぼみは見られない。珪化石英斑岩製。

石核（20） 左右両側縁を打面とする両設打面を有する横長剝片石核で、打面を転位しながら急傾斜な剝片剝離作業を行なう。上面は欠損する。讃岐岩質安山岩製。

表採資料

農学部実験水田A-2より弥生土器、須恵器を採取した。21は弥生土器甕の底部で、内面はやや内くぼみとなる。22・23は須恵器坏蓋。23は口縁端部内面にかえりをもつもので、内面横ナデ、外面ナデ仕上げ。外面に自然釉が付着する。

小結

今回の調査で検出した遺構には土壌、河川跡がある。なかでも、河川跡は深さは確認していないが、幅約2.5m前後で南東-北西に流路をもつ。出土遺物には須恵器、土師器、輸入陶磁器、甕口、石皿等があるが、主体を占めるのは須恵器で平安時代の初めのころのものが多く、やや遡るものを含む。また、白磁碗は横田・森田分類の白磁Ⅳ類に相当する

昭和60年度山口大学構内の立会調査

Tab. 6 出土遺物観察表

土 器							
No.	器 種	口 径 *底径 (cm)	器 高 (現存高) (cm)	色 調	胎 土	焼 成	備 考
河 川 跡							
1	須恵器 坏	* 6.3	(1.2)	灰白色(N7/0)	砂粒を若干含む	良好	
2	須恵器 坏	* 8.0	(2.0)	灰白色(7.5Y R8/1)	0.1cm以下の砂粒含む	良好	
3	須恵器 埴	* 7.7	(2.7)	灰白色(N8/0)	精 良	良好	
4	須恵器 埴	* 8.7	(1.4)	灰白色(N7/0)	砂粒を若干含む	良好	
5	須恵器 埴	* 7.0	(1.8)	灰色(N6/0)	砂粒を若干含む	良好	
6	須恵器 埴	* 9.0	(2.6)	灰色(N6/0)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	
7	須恵器 埴	*11.6	(1.3)	灰白色(N8/0)	砂粒を若干含む	良好	
8	須恵器 埴	14.4	(2.6)	灰白色(N7/0)	砂粒を若干含む	良好	
9	須恵器 蓋	—	(0.9)	外-明オリープ灰色(2.5G Y7/1) 内-灰白色(7.5YR8/1)	砂粒を若干含む	良好	
10	須恵器 高坏	—	(2.0)	外-灰白色(N8/2) 内-灰白色(N8/1)	精 良	良好	
11	須恵器 甗	11.0	(5.1)	灰白色(N7/1)	精 良	良好	口縁部外面下端に 一条の沈線
12	須恵器 器台	—	(3.5)	外-灰白色(N7/1) 内-灰白色(N8/1)	砂粒を若干含む	良好	脚部外面に沈線、 波状文
13	須恵器 横瓮	—	(5.7)	灰白色(N8/1)	精 良	良好	粘土円盤貼付痕有 り
14	須恵器 壺	*10.0	(2.9)	外-灰白色(7.5YR8/2) 内-赤褐色(7.5YR5/3)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	還元炎焼成なし
15	土師器 埴	* 6.2	(2.0)	灰白色(10YR8/2)	砂粒を若干含む	良好	
16	甗口	—	(2.8)	外-灰色(7.5Y5/1) 内-浅黄褐色(7.5YR8/3)	砂粒を若干含む	良好	外面は二次加熱に よる変色
17	白磁 埴	—	(4.7)	素地-白灰色(N8/0) 釉-明緑灰色(7.5GY8/1)	精 良	良好	Ⅳ 類
18	青磁 埴	—	(3.3)	素地-白灰色(N8/0) 釉-明緑灰色(5G7/1)	精 良	良好	
A-2の実験水田表採							
21	弥生土器 甗	* 5.6	(4.7)	外-淡赤橙色(2.5YR7/4) 内-灰白色(7.5YR8/1)	砂粒を若干含む	良好	風化が著しい
22	須恵器 蓋	—	(1.2)	灰白色(N7/1)	砂粒を若干含む	良好	
23	須恵器 蓋	—	(2.4)	外-灰白色(N8/1) 内-灰白色(N8/2)	砂粒を若干含む	良好	外面自然釉付着
石 器							
No.	器 種	長 さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 質	備 考
河 川 跡							
19	石皿	(11.7)	(13.0)	5.3	(853)	珪化石英斑岩	
20	石核	5.4	4.1	1.9	41	讃岐岩質安山岩	

吉田構内の立会調査

ものと思われ、13C前半に比定される。土師器はこれよりやや遡るものであるが、全体的に、平安時代ははじめから鎌倉時代はじめにかけて機能していた河川であると考えられる。

家畜病院正門付近で昭和61年度に山口市教育委員会が実施した立会調査では、幅約5mの規模をもつ同時期の河川跡が検出されており、本河川と同一のものである可能性が高い。また、今回検出した河川は、北側の飼料園、果樹園を含む地域と南側の飼料園を含む地域を分断するように南東-北西に流路をもつことから、両地域に平安～鎌倉時代にかけて別個の集落が存在していることを予想させる。また、鞆口、鉄滓の出土は、これらの集落内で鉄生産に伴う鍛冶が行なわれていたことを示し、今後の調査で工房跡が検出される可能性を孕んでいる。

よって、文化財保護の観点から今回の調査地域を含む飼料園では、少なくとも現地地表下約30～40cmで遺物包含層あるいは遺構面に達することから、今後の諸開発に対しては慎重な対応がなされねばならない。

(河 村)

〔注〕

- 1) 小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」(『学園だより』第6号、1970年)。
吉田寛「吉田遺跡採集の円筒埴輪について」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
- 2) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1978年)。

3 農学部附属農場農道改修に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 V-15・16区

調査期間 昭和60年11月26日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約 325m²

調査結果 工事内容は吉田構内の東端部、東門の北方にあたる農作業用機械の搬入道路を削平し、側溝をはさんで東側にある三角形の地域にその切土を盛るものである。

道路面の調査前の状況は、南端部付近が最も高く、北に向かうにつれて低くなっていることから、工事による切土の最高深度は南端部付近の約60cmで、最も低い北端部では切土は行なわないものであった。したがって調査は、この道路部分が周辺地域の造成の際盛土を行なっている可能性が高いところから立会調査とし、切土が行なわれる幅約5m、長さ約65mにわたる地域で実施した。その際まず南端部付近から立会調査を実施し、工事掘削深度内における埋蔵文化財の有無を確認するとともに土層の堆積状況を観察した。

その結果、現地表下約60cmまで腐蝕土および構内造成時等の置土（攪乱土）であった。この所見をもとに切土の浅い北の延長部分は工事内容から埋蔵文化財が確認される可能性が低いことから2ヵ所において立会調査を行なった。各地点とも地下の状況は南端部付近

と差異はなく、現地表下約60cmまでの掘削については埋蔵文化財に影響はないものと判断された。しかし、農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査で述べたように今回の調査地域の西方の実験水田で弥生土器、須恵器が表採されており、周辺に遺構ないしは遺物包含層の存在が予想され、以後、今回の掘削深度を越える工事に際しては慎重な対応が必要とされよう。

(河村)

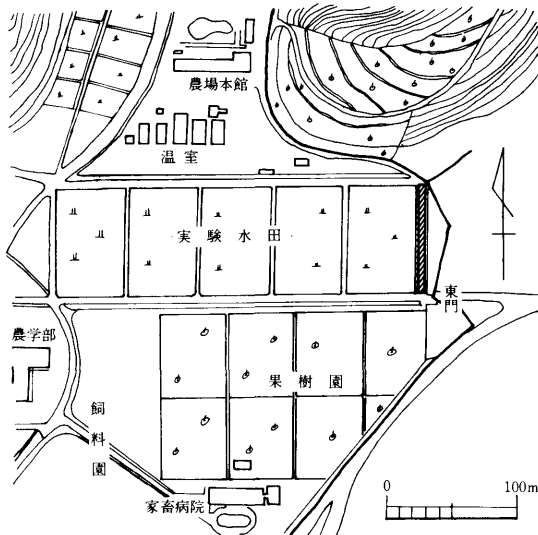


Fig. 35 調査区位置図

4 教育学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 教育学部構内 1・J-19・20区

調査期間 昭和60年12月3日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約430m²

調査結果 教育学部研究実習棟と第一学生食堂間に樹木移植等の環境整備が計画された。

当該地域は弥生時代中期後半～古墳時代前期の竪穴住居21棟が検出されている「遺跡保存地区」のすぐ東に位置しており、「遺跡保存地区」で現地表面下約40～50cmでこれらの遺構面に達することから、植栽工事による埋蔵文化財への影響が十分に考えられた。植栽は合計11本行なわれたが、研究実習棟新営の際の余掘部分および当該地域への既設配管の掘削地域と重複する部分が多く、工事内容、規模等を勘案し、第一学生食堂北側の、植栽予定地のほぼ中央部分2ヵ所を中心に立会調査を実施した。なお、調査時に現地表下約60cmの工事掘削基底面以内で埋蔵文化財が発見された場合、埋蔵文化財に影響が及ばない範囲内での植樹を行なうことで関係部局の了承が得られた。

その結果、11地点とも基本的には工事掘削基底面以内は置土（攪乱土）で、顕著な遺構および遺物包含層は確認できなかった。しかし、植栽予定地中央部の2ヵ所で深掘りを行なった結果、「遺跡保存地区」での遺構面と同一の黄褐色粘質土が置土直下の現地表下約80cmで検出された。なお、本工事地域と「遺跡保存地区」との現地表面の標高差はわずかであり、昭和56年度に調査を実施した美術科・技術科実験実習棟新営地でも現地表下約40cmで遺構面が検出される。したがって、この地山面の下降は後世の削平によるものではなく、旧地形の下降を意味しているものと思われ、同地域における遺構の埋存を予想させる。 (河村)

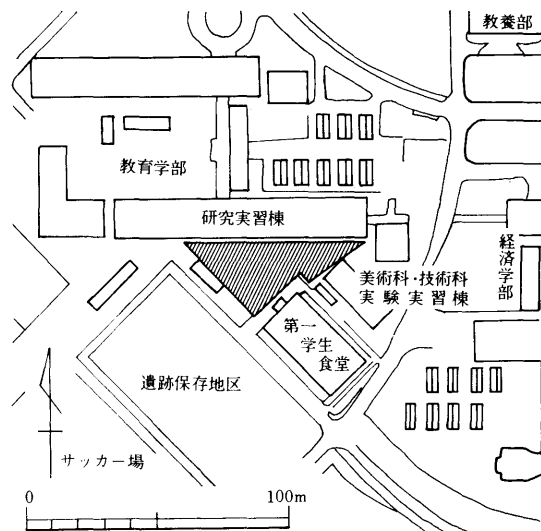


Fig. 36 調査区位置図

5 中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査

調査地区 本部構内 O・P-16区

調査期間 昭和60年12月13日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約2.5㎡

調査結果 調査地区はキャンパスの中央部のやや東寄りの地域に位置する。工事はボイラー棟南東隅において、焼却場への通行の際の車止を目的とした高さ約40cmの縁石を新設するものである。

周辺では今回の立会調査地区より一段高い北東約70mに位置する第二学生食堂敷地内で古墳時代前期の竪穴住居跡6棟が検出されており、また、すぐ北側の畑地でも8～9世紀代の須恵器、土師器が採集されていることから、工事規模を勘案して立会調査を実施した

ものである。

現状変更を伴う土地の掘削は弧状に巡る幅約50cm、長さ約5mの範囲で深さ約50cm削平するものであった。

調査の結果、現地表下約30cmまでは構内造成時等による近年の置土であったが、その直下には少なくとも厚さ約20cmの灰黒色砂礫土が堆積しており、須恵器の坏が出土した。

遺物 (Fig. 38, PL. 22-(1))

坏は高台の付かないもので、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は尖りぎみに終る。復原口径11.8cm、器高3.5cmで、口径に比べ器高が低い。内面は丁寧な回転ナデの痕跡が残るが、外面は磨滅・剝落のため調整不明。灰白色を呈し、焼成は軟質。胎土は微砂粒を含む程度で良好。

9世紀後半のものであろう。(河村)

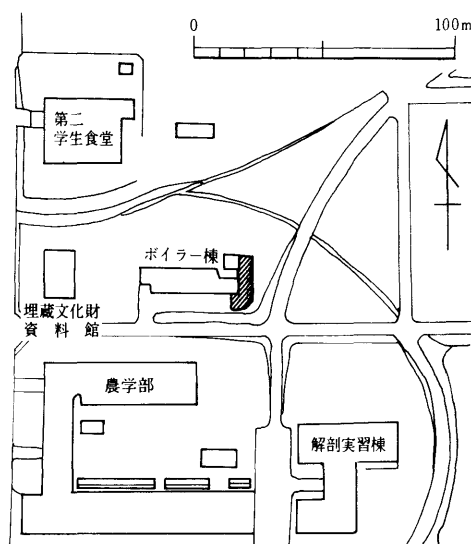


Fig. 37 調査区位置図

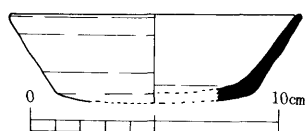


Fig. 38 出土遺物実測図

6 大学会館環境整備に伴う立会調査

調査地区 大学会館前庭下段部分 L・M-15区

調査期間 昭和60年12月23日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約9m²

調査結果 今回の環境整備は大学会館前庭下段部分に樹木（メタセコイヤ）4本を医学部より移植するものである。植樹地点は昭和60年6月～7月にかけて大学会館環境整備に伴う試掘調査（第3章参照）を実施した部分であり、当植樹地点を決めるにあたっては試掘調査結果を踏まえて、提示された景観上の計画を考慮にいれながら、できるかぎり遺構を中心とした埋蔵文化財に影響が少ない部分に設定することで合意が得られた。

植樹に伴う掘削は現地表下約70cm前後であった。試掘調査の結果、東に向うにつれて後世の削平が著しく、遺構の分布密度が希薄になること、また、C～Fトレンチの南端部付近を中心として地山が南に落ち込み、小規模な谷となっていることなどからC～Fトレンチ南端部付近への移植が妥当であろうとの結論に達した。しかし、C～E各トレンチにはこの落ち込み部分に遺物包含層が堆積し、とりわけ、Dトレンチでは厚さ約1mにも達することから、掘削による遺物包含層への影響が考えられたため立会調査を実施した。

その結果、弥生～鎌倉時代にかけての多量の遺物が出土した。特に、本学で二例目の墨書土器が出土し、大学会館新営に伴う調査で出土した石製鍔帯、緑釉陶器、畿内系瓦器、木簡などと共に農村集落とは異なる国家機構と連結した機関・施設の存在を予想させる。

(河村・森田)

遺物 (Fig. 40, PL. 22-(2))

弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓が出土した。なお、須恵器には墨書を持つものがある。

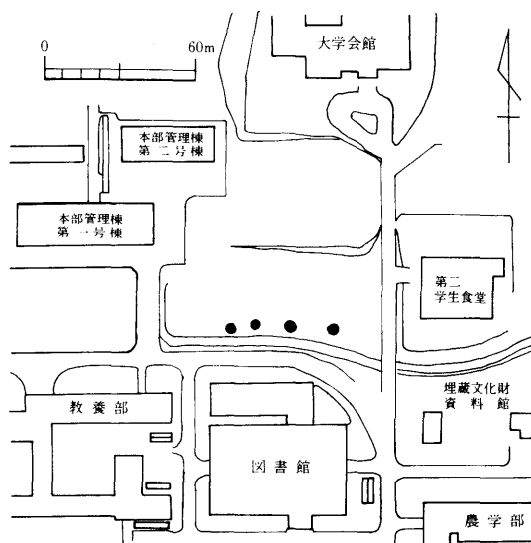


Fig. 39 調査区位置図

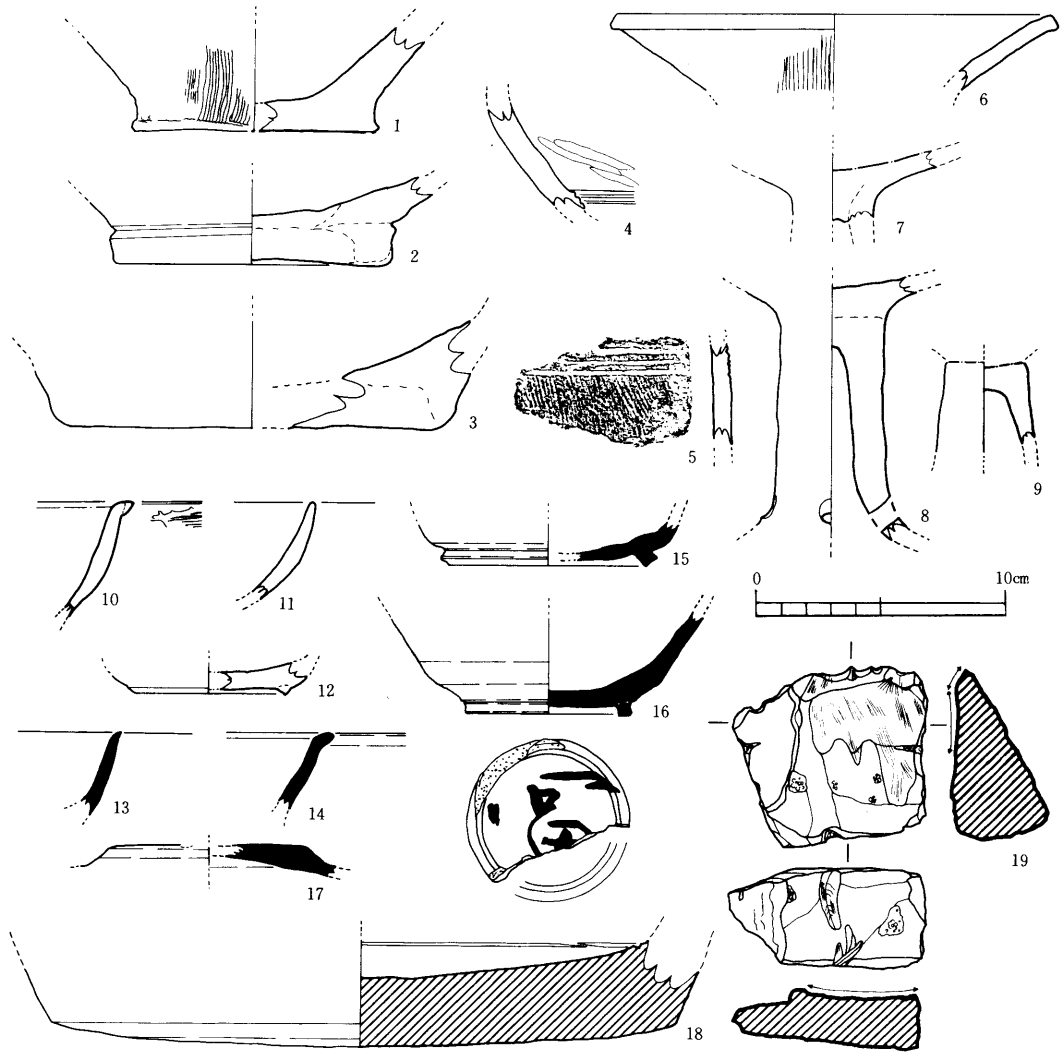


Fig. 40 出土遺物実測図

弥生土器（1～9） 今回出土遺物の中で最も量が多い。1は甕の底部。刷毛の始点が顕著に残る。2・3は壺の底部で、2は体部と底部との境にヘラによる太い沈線状の段をもつもの、3は大形で内面にわずかに刷毛目を残す。いずれも、円板状の粘土を貼り付けたどっしりした平底を成形する。4は壺肩部で、削り出しによる突帯状の段を有し、その上に少なくとも2条の沈線を施す。5は甕肩部で、縦方向の刷毛調整の後少なくとも4本の沈線を施す。6～9は高坏。6は口縁端部に平らな面を作っており、甕の可能性もある。

吉田構内の立会調査

Tab. 7 出土遺物観察表

土 器							
No.	器 種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色 調	胎 土	焼成	備 考
1	弥生土器 壺	* 9.8	(4.2)	淡黄色(2.5Y R8/3)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	
2	弥生土器 壺	*10.8	(3.6)	灰黄褐色(10Y R6/2)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	底部と体部の境に沈線(?)あり
3	弥生土器 壺	*14.4	(4.3)	にぶい黄橙色(10Y R6/4)	0.4cm程度の砂粒を多く含む	やや軟	風化が著しい
4	弥生土器 壺	—	(4.2)	外 - にぶい褐色(5 Y R5/3) 内 - 灰褐色(5 Y R6/2)	砂粒を若干含む	良好	肩部外面2条の沈線
5	弥生土器 甕	—	(4.1)	外 - 灰褐色(7.5Y R6/2) 内 - 明灰褐色(7.5Y R7/2)	0.3cm程度の砂粒を多く含む	良好	肩部外面3条以上の沈線
6	弥生土器 高坏	17.4	(3.0)	外 - にぶい橙色(7.5Y R7/4) 内 - 灰白色(7.5Y R8/2)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	
7	弥生土器 高坏	—	(3.0)	浅黄橙色(7.5Y R8/3)	砂粒を多量に含む	良好	
8	弥生土器 高坏	—	(10.5)	浅黄橙色(7.5Y R8/4)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	
9	弥生土器 高坏	—	(3.6)	灰白色(10Y R8/1)	砂粒若干含む	良好	
10	土師器 埴	—	(4.6)	外 - 灰白色(10Y R7/1) 内 - 褐灰色(10Y R4/1)	砂粒を若干含む	良好	
11	土師器 埴	—	(3.9)	外 - 灰白色(10Y R8/2) 内 - 橙色(2.5Y R7/6)	精 良	良好	
12	須恵器 埴	* 6.0	(1.2)	外 - 灰白色(7.5Y R8/2) 内 - 浅黄橙色(7.5Y R8/3)	精 良	良好	
13	須恵器 埴	—	(3.5)	灰白色(2.5Y 8/2)	砂粒を若干含む	良好	15と同一個体か還元炎焼成なし
14	須恵器 埴	—	(3.1)	灰白色(5 Y 7/1)	砂粒を若干含む	良好	16と同一個体か
15	須恵器 埴	* 7.8	(1.8)	外 - 灰白色(2.5Y 8/1) 内 - 灰白色(2.5Y 8/2)	砂粒を若干含む	良好	13と同一個体か還元炎焼成なし
16	須恵器 埴	* 6.6	(4.2)	灰色(7.5Y 6/1)	砂粒を若干含む	やや軟	14と同一個体か外底に「富」の墨書
17	須恵器 蓋	—	(1.2)	灰白色(N7/1)	砂粒を若干含む	良好	
石 器 () は現存値							
No.	器 種	長 さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
18	石鍋			3.0	(1132)	滑石片岩	
19	砥石	(6.8)	7.6	4.0	(224)	結晶凝灰岩	

7は円板充填法による坏と脚の接合部。充填円板の下面に指頭痕が残る。8・9は貼り付け法により坏と脚を接合するもので、8は脚の周囲を四分割した位置にそれぞれ透かし孔をもつが、四方のうち三方に穿孔するにとどまる。9は内面上部に爪痕が残る。

土師器(10~12) 10は埴か鉢になるものと思われる。内面は黒色で刷毛の後力強くナデられ器面が密になるが、口縁は外面に折り返して乱雑にナデつけ、その下に横刷毛が残る。11は埴または高坏の口縁部でナデ仕上げ。12は断面三角形の小さな高台をもつ埴。

須恵器（13～17） 13・14は埴口縁部。13は焼成良好だが炭素の吸着が見られない。14は端部がややきつく外反し、胎土が粗いのが特徴。15・16は埴底部。15は底部回転ヘラ切りの後内側の接地する高台を付すもので、13同様炭素を吸着しない。接合点はないが13と同一個体と思われる。16はほぼ直立するやや小形の高台をもつもので、外底に「富」の墨書を有する。墨書は一部高台にもかかっている。底部は回転ヘラ切り後ナデ、高台の貼り付けはやや粗雑。内底は見込み部分のみ色調が暗く、重ね焼きのためかと思われる。14と同一個体であろう。17は蓋で撮みを欠損する。天井部外面は回転ヘラ切り後粗いナデ。

石鍋（18） 器壁の厚い大型品。破損のしかたからみて平面形態が楕円形の可能性がある、長径と思われる部分で測図したが、もし正円形ならば底径35cmほどにも大きくなる。器表・器肉とも無数の小さな孔があいており、鍋としての機能を果たし得るかどうかが疑問であるが、内外面ともよく研磨し、内底見込みに沈線状の段を有し、外面全体に煤の付着するところから、石鍋と判断した。²⁾滑石片岩製。

砥石（19） ほぼ三角柱状。主研砥面は一面で、その裏面は未使用だが、他の3面には鋭利な刃先痕が残る。研砥により厚さを減じた部分で折損したものと思われる。原材は砂粒が粗く、荒砥用であろう。結晶凝灰岩製。

鉄滓（PL. 22-(2)20） 最大長4.5cm、最大幅3.9cm、最大厚2.8cm、重さ35g。体積の割に軽く、鉄分の残存率はかなり低くなっているものと思われる。

以上、包含層出土のため遺物にはかなりの時期幅がある。弥生土器のうち甕・壺は前期の特徴を有し、高坏は後期のものと思われる。土師器も古墳時代のものから12Cに下るものまで幅広い。須恵器はほぼ奈良時代末～平安時代初のもので、特に墨書のあるものは識字層の存在を裏付け、官僚機構の一端を担う施設が近隣に所在したという可能性を一層高めるものとなった。³⁾（杉原）

〔注〕

- 1) 人文学部八木充教授に見ていただいたところ、「富」（「富」の異体字）にまちがいないとのこと。さらに、かなりの達筆で、筆跡・字形に地方性が感じられないところから、おそらくは中央官僚・貴族の手になるものであろう、との興味深い御教示を得た。
- 2) 器壁が厚く、多孔質であるなど、かなり異型のものであるが、同様の特徴をもつものが熊本県上益城郡矢部町大矢野原北猪見で採集されている。ただし、内面の仕上げ研磨が施されていないという相違がある。福田正文・坂田和弘・烏津義昭「大矢野原の石鍋」（『肥後考古』第4号、1983年）。
- 3) 森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相—吉田遺跡をめぐる諸問題—」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年）。

7 交通標識設置に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 N-14, O-18, J-20区

調査期間 昭和60年12月23日

調査方法 工事施工における立会調査

調査面積 約3㎡

調査結果 工事は車両通行規制区域を表示するための交通標識を吉田構内7ヵ所に設置するものである。しかし、工事による掘削深度は約30~60cmと比較的浅いため、工事地域周辺で同様の掘削規模範囲内で埋蔵文化財に影響を及ぼさずおそれのある地域と工事地域周辺の地下の状況が不明瞭な地域を選定して立会調査を実施した。調査地域は第2学生食堂周辺地域(第1地点)、理学部R1棟周辺地域(第2地点)、および「遺跡保存地区」周辺地域(第3地点)の計3ヵ所である。

第1地点は深さ約50cmの掘削であった。現地表下約45cmまでは腐蝕土および構内造成時の置土(攪乱土)の堆積がみられたが、それ以下は、赤橙褐色土の山土が観察された。第2学生食堂北方の崖面での土層堆積状況を観察すると、地表下約30cmでこの山土が認められ、下位は岩盤となっている。また、当該地域はこの北方地域と比べ約2m低くなっていることから、北から延びる低丘陵が階段状に削平・造成されていることが看取され、埋蔵文化財遺存の可能性は極めて低い。

第2地点では現地表下約60cmまでの掘削を伴うものである。約50cm掘り下げた段階で灰黄褐色粘質土の堆積が見られたが、遺物は包含していなかった。

第3地点では工事基底面である現地表下約35cmまで遺構・遺物の有無を観察したが、周辺地域における過去の調査結果から遺物包含層ないし遺構はさらに下位に埋存しているものと推察される。

(河村)

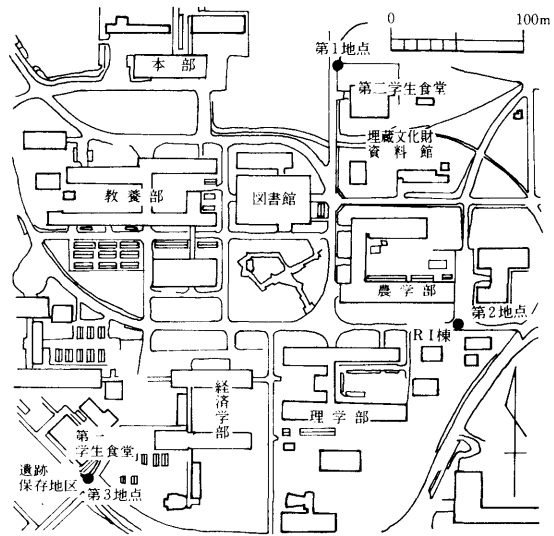


Fig. 41 調査区位置図

8 農学部解剖実習棟周辺（第1地点）および附属家畜病院（第2地点）

環境整備に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 P・Q-17・18区, S・T-19区

調査期間 昭和61年2月10日（第1地点）, 24日（第2地点）

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約16m²（第1地点）, 270m²（第2地点）

調査結果 第1地点周辺地域は道路を隔てた東側の飼料園に比べ現地表が約5m近く低くなっている。昭和54年度に本地域の南側で実施した農学部動物舎新営に伴う試掘調査で厚さ約60～110cmの置土（攪乱土）直下が黄褐色礫混じり粘質土の地山で、遺物包含層、遺構は検出されなかった。また、本節で述べた農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査における地山面との標高差から推しても、東側からのびる丘陵がこの地域付近で階段状にカットされていることが看取される。第1地点での工事内容は解剖実習棟南東の空闲地にコンクリート舗装、U字溝、汚水桝、犬飼育舎および鉄製フェンス等の各種施設を新営するものであったが、以上の所見により立会調査にとどめた。

その結果、工事地域全域について現地表下厚さ約15～20cmの攪乱土直下に黄褐色礫混じり粘質土の地山が検出されたが遺物包含層、遺構は認められず、当該地域では過去に埋蔵

文化財が遺存していたとしても、やはり既に消失している可能性が高い。第2地点は、家畜病院と果樹園間の現地表を約10cm掘削し、アスファルト舗装をするものである。その結果、約5～7cmの掘削で赤黄褐色粘質土の地山が検出されたが顕著な遺物包含層、遺構は認められず、当該地域が北側の果樹園に比べ約1.5m低くなっていることから、家畜病院周辺は多少なりとも削平を受けているものと考えられる。

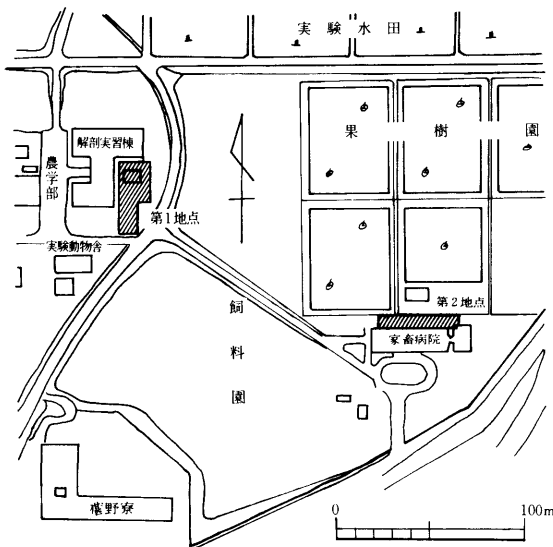


Fig. 42 調査区位置図

(河村)

9 理学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 理学部構内 N-20・21区

調査期間 昭和61年2月10日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約4m²

調査結果 人文学部および理学部大学院棟間に環境整備の一環として、藤棚の新営が計画された。調査は、藤棚支柱基礎部分を中心に土層の堆積状況、遺構、遺物包含層の有無を観察したが、工事基底面である現地表下約80～100cmまでは攪乱土であった。

周辺地域では、昭和53年度に人文学部校舍新営に伴い試掘調査、昭和58年度に理学部大学院校舍新営および付随工事に際して立会調査が実施されている。前者では、新営予定地内に設定した3本のトレンチによる調査が行われた。その結果、腐蝕土および構内造成時等の置土（攪乱土）下位に旧耕作土が認められ、その直下が黄橙（褐）色粘質土の地山であった。地山は、最も浅い箇所では現地表下約100cmで検出されたが、近世の柱穴若干が認められたにすぎなかった。後者でも遺構は検出されなかったが、土層の堆積状態、地山の検出される深度には差異がみられず、当該地域周辺が本学移転前の水田造成の際、すでに大規模な削平を受けていることが推察される。また、東に向かうにつれて、この旧耕作土をも削平する構内造成が行なわれ、道路を隔てた東側の飼料園に比べ約5m近く階段状に低くなっていることから、現在飼料園となっている古墳時代から中世にかけての柱穴・土壙等が検出された丘陵は、少なくとも人文学部構内および理学部構内東・南部で大きく削平され、これらの地域では遺構の埋存する可能性は極めて低いものと考えられる。

(河村)

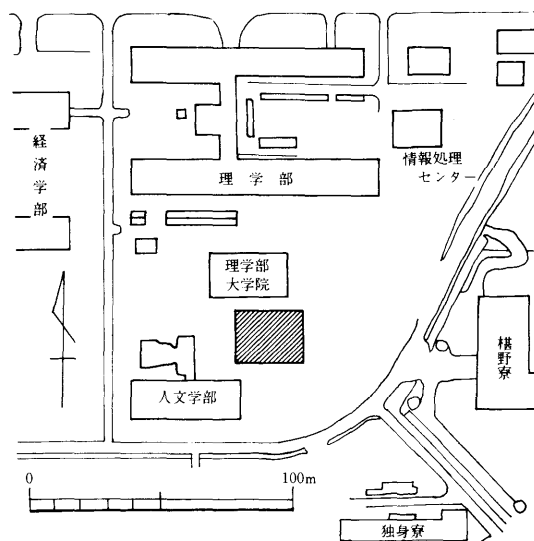
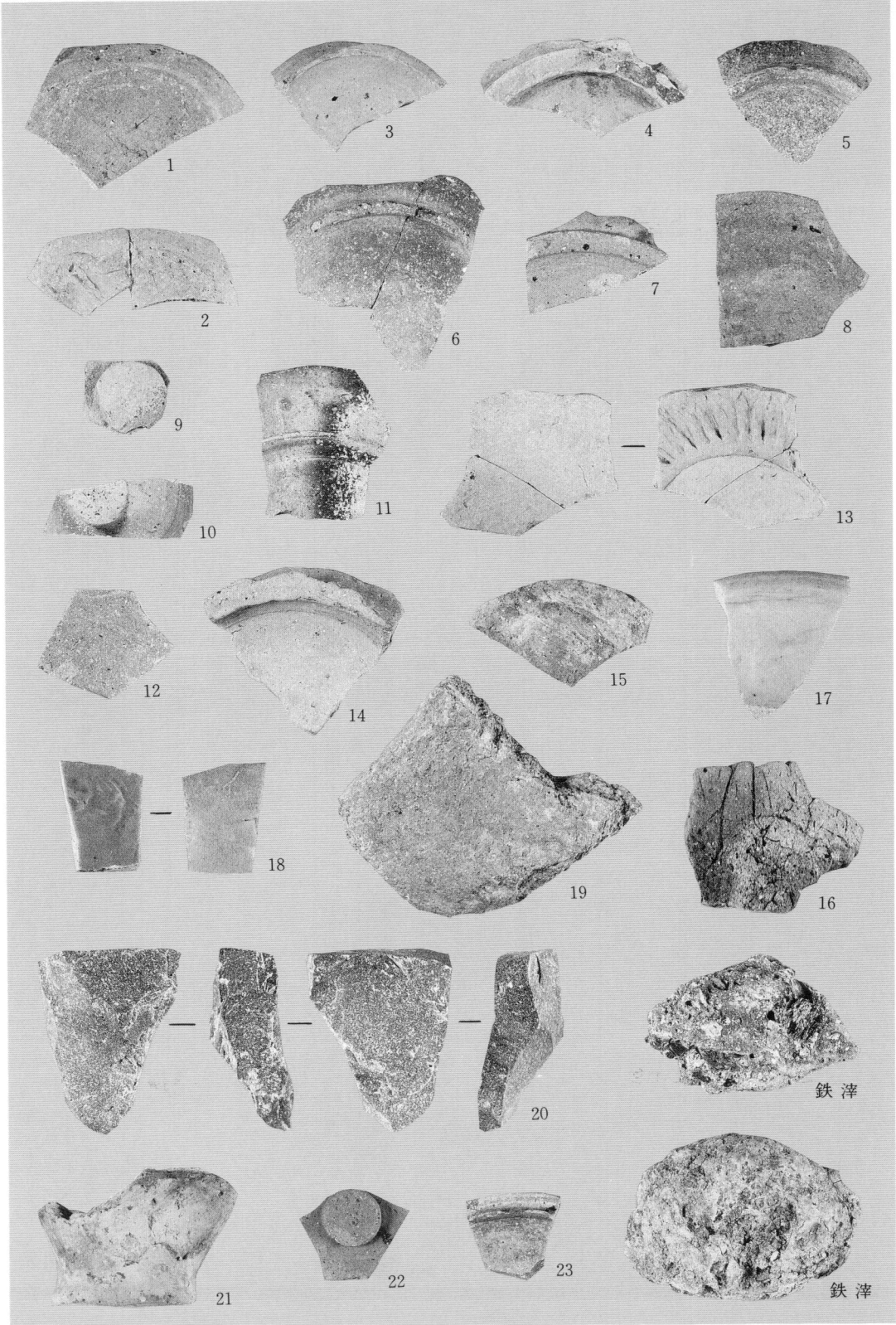


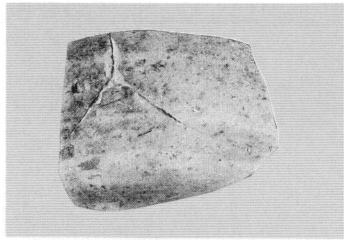
Fig. 43 調査区位置図



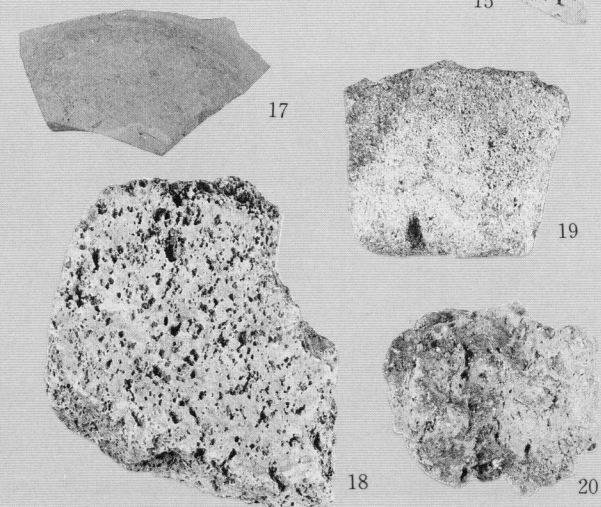
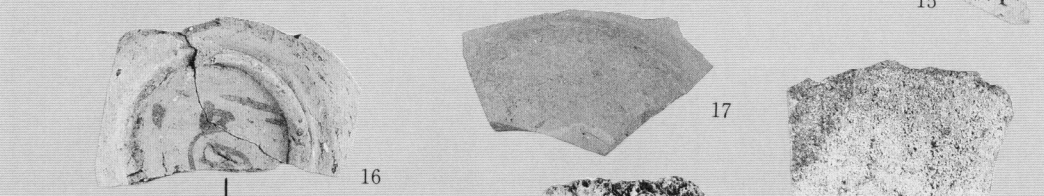
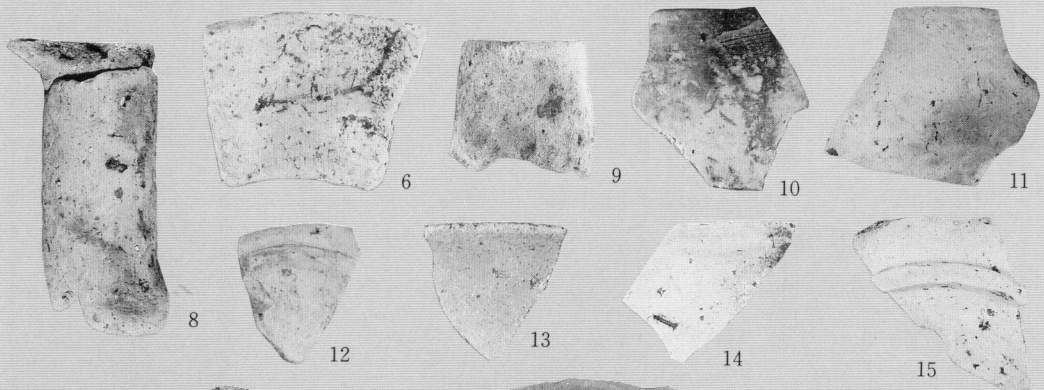
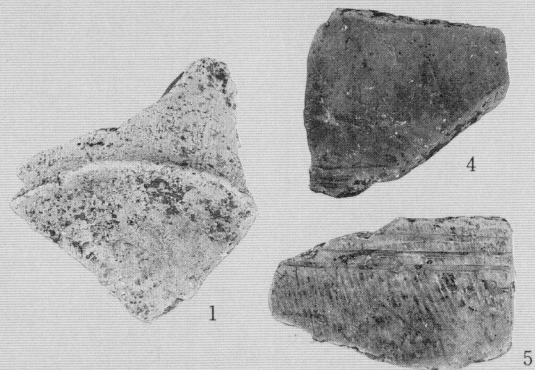
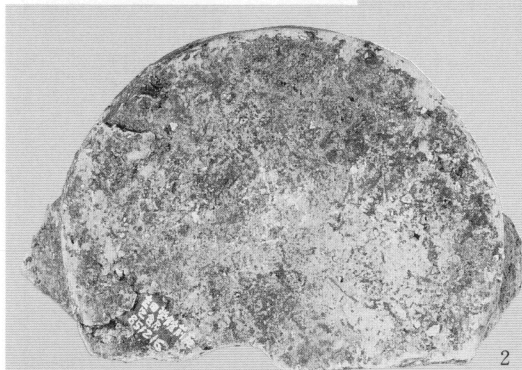
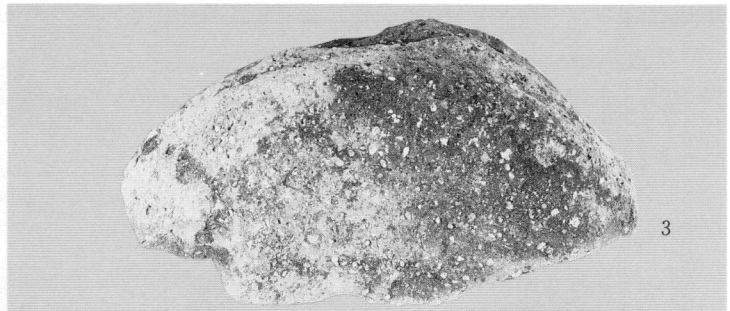
農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査出土遺物

PL. 22

昭和60年度山口大学構内の立会調査(2)



(1)中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査出土遺物



(2) 大学会館環境整備に伴う立会調査出土遺物